

# 学校体育における地域スポーツの教材的価値

—練馬区キャッチバレーボールに着目して—

玉腰 和典<sup>1</sup>・田中 紗良<sup>2</sup>

## Teaching Material Values of Local Sports in Physical Education

—Focusing on Catch Volleyball in Nerima—

Kazunori TAMAKOSHI and Sara TANAKA

E-mail : tamakosi@edu.u-toyama.ac.jp

### 【摘要】

本研究では、生涯スポーツの実現に向けて、地域スポーツを学校体育へ導入していくために、練馬区キャッチバレーボールにはどのような教材的価値があるのかを解明することを目的とした。方法としては、資料分析・インタビュー調査・アンケート調査から、練馬区キャッチバレーボールの歴史的特徴、生涯スポーツとしての特徴、独自の魅力、児童期に導入する上での適性、はじくバレーボールへの発展性について検討した。結果、練馬区キャッチバレーボールの教材的価値は、①簡単な動作で誰もが参加でき、安全に配慮されていること、②バランスよく運動能力を育成でき、空中でボールをつなぎ合うバレーボールへも発展していくこと、③独自のおもしろさをめぐる戦術・技術的な探求ができること、④スポーツの社会的、文化的な認識を育成できること、⑤体育科・保健体育科だけではなく、他教科や特別活動とも関連させられることが解明された。

キーワード：体育科教育，地域スポーツ，教材的価値，練馬区キャッチバレーボール

Keywords : Physical education, Local sports, Teaching Material Values, Catch Volleyball in Nerima

## I. 本研究の背景と目的

### 1. 多様なスポーツの教材化

戦後の日本は、軍国主義教育を反省し、民主主義教育へと転換する上で、体錬科から体育科へと名称変更するとともに、欧米にて普及していた近代スポーツを学校体育へと導入した。その後、1970年代になると、ヨーロッパで生じた sport for all 運動の影響から、生涯スポーツの教科理念を提起するようになる。同時に、わが国においても、多様なニュースポーツや地域スポーツが開発・普及される。これにより、わが国におけるスポーツ構造は、近代スポーツを頂点として高度化と大衆化が統一された富士山型のスポーツ構造から、多様なスポーツとその楽しみ方が共存した八ヶ岳型のスポーツ構造

へと変化している（早川，1994）。そして、生涯スポーツを志向する学校体育においても、近代スポーツだけではなく、多様なスポーツを教材化した体育実践が見られるようになる（張・長見，2012）。このように、今日においては、生涯スポーツを実現する上で、近代スポーツだけではなく地域スポーツやニュースポーツをどのように教材化するのか、ということが実践的な課題となっている。

### 2. 地域スポーツの教材化

出原（2004）は、運動文化創造の歴史や、市民がスポーツをみんなが楽しめるものへと変革・創造する実態をふまえ、体育科教育がめざす学力を、①スポーツ実践の学力（スポーツをする力）、②スポーツ批評の学力（スポーツを見る力）、③スポーツ変革の学力（スポーツを変える力）と提起している。すなわち、スポーツをより豊かなものへと変革・創造していく主体者を育成する上では、スポーツを「変

<sup>1</sup> 富山大学学術研究部教育学系

<sup>2</sup> 明治学院大学 2020 年度卒業生

える・つくる」側面をも学習の対象にしていくことが重要だと述べている。

出原（2004）が提起する学力観をふまえれば、地域スポーツの教材化は注目すべきことであろう。地域スポーツは、その土地に居住する人たちが長年かけて創造してきたスポーツであり、スポーツを変革・創造する身近な事例となる。また、地域スポーツは多様な年齢や能力をもった市民を対象とする。そのため、ルールづくりにおいては、様々な議論や経緯が存在していることが想定され、どのようにみんなが楽しめるスポーツを創造していくのか、という視点を学習できる可能性をもっている。

また、2017年改訂学習指導要領では、「体育科の見方・考え方」が提起され、ここでは、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育むために、スポーツの「する、みる、支える、知る」といった多様な側面を学習していくことが明示されている。地域スポーツを教材化することは、多様なスポーツのあり方を理解することにつながるとともに、上述したようなスポーツに関連する幅広い学習を展開できる可能性をもつ。

### 3. 練馬区キャッチバレーボールへの着目

日本では、1964年に開催された東京オリンピックにおける全日本女子バレーボールチームの活躍が契機となりながら、家庭婦人バレーボールが流行し、全国的な広がりを見せる（内海、2001）。そして、全国へ広がるとともに、多様な地域バレーボールとして作りかえられ、発展させられている。例えば、大分県中津市泥田（どろんこ）バレーボール、高知県田野町のスカッシュバレーボール、愛知県名古屋市のリクリエーションバレーボール、富山県朝日町のビーチボール、東京都練馬区のキャッチバレーボール、千葉県浦安市のトリムバレーボール、宮城県栗原市の家庭（ビニール）バレーボールなどがあげられる<sup>1)</sup>。

学校体育においては、小学校3年生からネット型ゲームが提示されている（文部科学省、2018）。そのため、小学校中学年から高等学校までの体育カリキュラムの中で、地域バレーボールを教材として導入できる可能性をもつ。しかし、地域バレーボールの学校体育への導入を検討した研究はあまりみられない。

地域バレーボールを学校体育へ導入する上では、まず、それらがどのような教材的価値をもつのかを

解明することが必要となるだろう。この課題を解決する上で、地域バレーボールの中でも、約50年の歴史をもち、かつ小学生リーグも実施している練馬区キャッチバレーボールは注目できる。練馬区キャッチバレーボールは、東京都練馬区を中心に普及し、競技人口は、2018年時点で1000人を超えている。空中でボールをはじいてつなぎ合うバレーボール（以下、はじくバレーボールと省略する）とは異なり、ボールを手でキャッチして、両手でコントロールする点に大きな特徴がある。また、大会も頻繁に開催され、小学生、女子ヤング（中学生以上の女性）、一般女子（25歳以上の女性）、一般男子（中学生以上の男性）の部が設定されており、老若男女が参加している。練馬区キャッチバレーボール協会が設置されており、大会等の組織・運営を担当している（練馬区キャッチバレーボール協会、web）。

練馬区キャッチバレーボールを取り上げた先行研究としては、草馬・梅垣（2009）、梅垣ら（2009）、村井（2018）があげられる。草馬・梅垣（2009）と梅垣ら（2009）においては、練馬区キャッチバレーボールを修正した教材で、戦術学習を中心的な観点としてその有効性を解明している。また村井（2018）は、近代スポーツに対するオルタナティブなバレーボールの普及における特徴を検討する際、対象の1つとして練馬区キャッチバレーボールを取り上げている。しかし、これらの先行研究においては、練馬区キャッチバレーボールの部分的な特徴を検討することにとどまっている。学校体育における教材化を検討する上では、素材そのものの特徴についての総合的な理解を深め、その教材的価値を解明していく必要がある。特に、運動文化の変革・創造の主体者形成をめざす上で、地域スポーツの教材化は、運動学習や戦術学習といった観点にとどまらず、歴史、独自性といった観点からも検討される必要がある。これは、地域スポーツの教材的価値を解明する上で、まずは、その地域スポーツが現在どのような特徴をもつのが検討課題になることを意味する。また、単一の教材として完結するのではなく、カリキュラムとして構想するためには、教材の発展性の観点からも検討される必要がある。

以上より、本研究では、生涯スポーツの実現に向けて、地域スポーツを学校体育へ導入していくために、練馬区キャッチバレーボールには、どのような教材的価値があるのかを解明することを目的とする。

## II. 研究の対象と方法

研究の対象は、練馬区キャッチバレーボールとし、①歴史的特徴、②生涯スポーツとしての特徴、③独自の魅力、④児童期に導入する上での適性、⑤はじくバレーボールへの発展性<sup>2)</sup>を検討していく。

研究の方法は、資料分析・インタビュー調査・アンケート調査とする（以下、丸数字は上述した検討課題を意味する）。調査対象者は、地域スポーツとしての歴史的特徴や現在の特徴を解明することを意図して、中学生以上の選手や協会役員とした。

インタビューは、①の検討課題について、2019年6月9日に、歴史に詳しい2019年度会長A氏およびルール改正に関わったB氏へ半構造化インタビューを実施した。③の検討課題について、2019年6月9日に、協会役員の中でも、協会理事・一般選手・小学生チームの監督といった多彩な経験をもつC氏へインタビューを実施した。また、資料として、練馬区キャッチバレーボール協会が発行する記念誌や過去のルールブックを入手し、分析した。

④⑤の検討課題について、2019年3月3日に、15年以上の指導歴をもつ小学生チームの監督3名（D氏、E氏、F氏）へ半構造化インタビューを実施した。

アンケート調査は、②③④⑤の検討課題について、女子ヤングおよび一般部門（男子の部・女子の部）でプレーをしている中学生以上の選手（男性13名、女性20名）へ実施した。実施時期は、6チームのメンバーで合同練習が開催された2019年4月13日および第25回オープン大会が開催された2019年6月9日であった。アンケートは対面で調査依頼をし、その場で回答をしてもらった。また、郵送を希望する対象者には、後日郵送にて回収した。対象者は、練習や大会の参加者からランダムに抽出した。対象者の年齢は、15～20歳（n=5）、21～25歳（n=5）、26～30歳（n=5）、31～35歳（n=1）、36～40歳（n=5）、41～45歳（n=3）、46～50名（n=7）、55～60歳（n=2）であった。アンケート調査における自由記述の回答結果については、類似する内容をまとめてカテゴリーに区別し、分析した。

考察の手順としては、まず文献およびインタビュー調査から、①練馬区キャッチバレーボールの歴史的特徴を検討する。その後、インタビューおよびアンケート調査から、練馬区キャッチバレーボールにおける、②生涯スポーツとしての特徴、③独自

の魅力、④児童期に導入する上での適性、⑤はじくバレーボールへの発展性を検討する。そして、それらをふまえて、練馬区キャッチバレーボールの教材的価値について考察し、最後に地域スポーツを教材化する視点について課題提起する。

## III. 練馬区キャッチバレーボールの歴史的特徴

### 1. 少女のためのスポーツとして開発<sup>3)</sup>

練馬区キャッチバレーボールの前身は、ネットボールというスポーツであった。

1969年に、不良化防止等の目的をもって青少年育成南町地区委員会（現在・桜台地区委員会）による第1回小学生野球大会が開催される。しかし、当時野球を経験しているのは男子児童だけであり、また、女子児童のスポーツは普及していなかったため、次年度には女子児童も参加できる大会を開催することが課題となる（練馬区ネットボール協会、1994；梶ら、2009）。

そして、翌年に当時の青少年南町地区委員会の吉田徹雄が小竹町会長も兼務していたこともあり、小竹小学校の井上勲教諭に、男子児童の野球に対応した女子児童のスポーツを何にしたらよいか相談する。井上教諭は、1953年改訂学習指導要領（試案）に、ネットをはさんでドッジボールのようにボールを投げて競争する「ネットボール」（図1）が提示されていたことを想起し、それをもとに旭丘小学校の岡留教諭、開進第三小学校の渡辺教諭、開進第四小学校の青木教諭たちと度々集まって協議を重ね、ルールの基礎を作成した（井上、1999）。

当時のルールは12人制で、ボールを弾くのではなくキャッチする、という事以外は、ほとんど9人制バレーボールのルールに依拠していた。また、アタックは両手でキャッチした後に片手で投げた。しかし、高身長の子が参加した際、片手では打点が高く、真下に落ちるようなアタックを打ったため、両手アタックに改正されることになる。

さらに、当時は1964年に開催された東京オリンピックで全日本女子バレーボールチームが金メダルを獲得し、バレーボール人気がとても高い時期であった。また、ルールが小学生向けに改良されていたため、ネットボールはすぐに受容され、第1回大会が南町地区で開催されることになる（梶ら、2009）。

このように、練馬区キャッチバレーボールは、もともと少女のためのスポーツとして、学習指導要領に記載された「ネットボール」と「9人制バレーボール」を参考に開発されたものであった。また、アタックを両手で投げるようになった理由は、身長差によって勝敗が決定することを回避するためであった。ここから、練馬区で生活する少女たちみんなが楽しめるスポーツへと改変していくことをめざした経緯が把握できる。

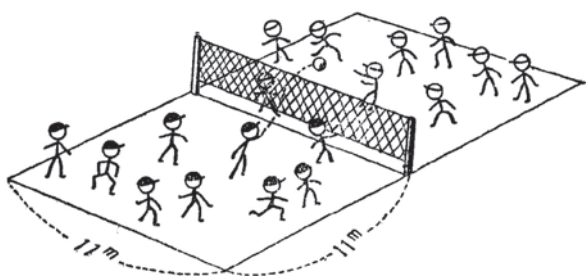


図1. 学習指導要領(試案)に提示されたネットボール(文部省, 1949)

## 2. 練馬区キャッチバレーボールの普及過程

ネットボールは、学校教員を中心に開発されたこともあり、当初は学校の教員がネットボールの指導にあっていた。その後、1972年頃から徐々にボランティア指導員によるクラブチームが設立されるようになる(梶ら, 2009)。

最初の拡大の契機もまた、教員の異動によるものであった。当時、土支田地区にある豊溪小学校の新保体育指導員が、開進第二小学校から転任してきた赤松校長に、南町地区には「ネットボール」という、女子児童のスポーツがあると紹介され、実施するようになる。そのことが契機となって、他の地区からも南町地区大会に参加するようになる(梶ら, 2009)。

その後、体育協会役員であった野口嘉郎と相談をし、規約づくりや協会づくり、大会開催について話し合い、1979年に練馬区ネットボール大会開催準備委員会を設立する。この年、練馬区体育協会が創立30周年を迎えており、記念事業にスポーツ少年団を立ち上げていた。その初事業にネットボールを取り上げることとなり、1980年に第1回ネットボール大会を開催する(野口, 2009)。

そして、1981年に練馬区ネットボール協議会が発会し、翌年には練馬区ネットボール協会へ改名さ

れる。登録チーム数も増加していき、1980年の第1回大会は7チームであったが、1983年の第4回大会の頃には、練馬区の全小学校のおよそ半分にあたる、34校となる(梶ら, 2009)。

その後、子どもだけではなく、その指導者や保護者からもネットボールをプレーしたいという要求がでるようになり、1990年の第1回ママさんネットボール大会が開催される。

しかし、練馬区キャッチバレーボールも、少子化や多様な種目で少年スポーツが普及してきたことの影響を受け、競技人口の減少が課題となり、1992年少女夏の大会から、12人制から9人制へ移行することになる<sup>4)</sup>。

こうして、競技人口減少への対応がもとめられるとともに、一般の部の大会も開催されるようになることで、行政機関との連携や練馬区体育協会への加盟がめざされる<sup>5)</sup>。そして、1994年から、当時、練馬区体育協会副会長であった野口嘉郎の指導をもとに、梶和美会長を中心にして、練馬区体育協会に加盟する準備が進められる(桜井, 2009)。練馬区体育協会に加盟するためには、組織体制の確立と生涯スポーツ化が課題となる<sup>6)</sup>。練馬区ネットボール協会はその課題に対応し、1996年に加盟承認されることになる。加盟承認を契機として、第2回オープン大会から、一般女子・一般男子・女子ヤングの3つの部門が設定される。そして、1998年には、ネットボール大会が練馬区民大会の一環として開催されるようになる。こうして、練馬区体育協会加盟を契機として、生涯スポーツ化が進展し、徐々に参加対象者や規模が拡大していく。

その後、2001年に、日本で国際的なスポーツ大会「ワールドゲームズ秋田2001」が開催される事になり、それをきっかけに、1999年にバスケットボール系の「日本ネットボール協会」が発足・登録される。同じ名称を回避するための名称変更について、常任顧問であった野口嘉郎から助言をうける。そして、2000年3月の臨時総会で「キャッチバレーボール」に正式決定することとなる(柳沢, 2009)。以後、練馬区キャッチバレーボール協会として競技の普及・発展がめざされていく。

## 3. ルール改正委員会による整備<sup>7)</sup>

練馬区キャッチバレーボール協会では、ルール改正委員会を設置し、2013年に9人制のルールが、

2014年に6人制のルールが整備されている。これまで、1994年に改正されたネットボール競技規則を参照していたが、曖昧な記述が多かったため、大会を開催するごとにルール上のクレームがでていた。どこまで動きを制限するのかが曖昧な部分が多く、審判によって判定基準に差異がでてしまっていた。

そこで、協会としては大会ごとに申し合わせ事項を別紙にて提示し、ルールへの合意を図っていた。しかし、競技規則が明確な基準をもっていないことは、競技を普及する上で障害となってしまうことを問題視し、ルール改正委員会を設立して改善をめざしていく。

ルール改正委員会では、1年間かけてルールを協議していった。その方法は、バレーボールの競技規則を参照し、有効なものはそのまま転用し、練馬区キャッチバレーボールに合わない点は削除・修正・加筆していく方法であった。既存の競技規則を利用することで、競技規則としての体系性をもたせようとするねらいがあった。

この時、議論になったのは、詳細なからだの動かし方についての規則であった。そして、それらの改正において重視したのは、人間の自然な動きを許容することであった。これまでの経緯としても、ネットボール競技規則において、「たえずルールの検討を行い、子供たちの自然の動きを重要視し、誰にでも親しまれるスポーツをめざす」（ネットボール協会、1994、p.3）してきている。児童を対象にして開発されたスポーツであるため、無理に身体を動かすことについては、ルール上なるべく改善しようとしてきており、そのことが現在においても継承され、重要視されているのである。

具体的には、次のようなルール改正がなされている。

1994年度版の競技規則では、第15条第4項「送球動作」において、「1. 競技者が完全に捕球した後、送球が完了するまでは、軸足を移動してはならない」（ネットボール協会、1994、p.20）と規定されていた。しかし、「軸足の移動」の基準が曖昧となっており、審判の判断に差異がでてしまっていた。この課題についての協議の結果、進行方向とは異なる位置へ送球する際は、軸足が回転することは自然なことでありと判断される。そして、2013年度版においては、第22条第2項3にて「送球または返球の際のつま先またはかかとを軸とした、身体の回転に伴う足の動きは、つま先またはかかとを軸とした二分の一回

転以内の動きは、反則としない」（練馬区キャッチバレーボール協会、2013、p.19）と規定している。その他、様々な部分で自然な動きを許容する詳細な規定が作成される。

ルールが曖昧な点は大会に参加した選手たちのプレー上の疑問や修正を要求する声によって把握されることになる。ここでは、練馬区キャッチバレーボールが誕生した経緯と、選手たちの声を大事にしながら、みんなが楽しめるルールが生成されていく過程が把握できる。ルールを選手も運営者も一緒になってつくりあげていく様子は、現代における運動文化の主体者像を示唆する事例である。

#### 4. 練馬区キャッチバレーボールのルールにこめられた願い

このように、練馬区キャッチバレーボールが大衆スポーツとして創造される背景には、運動が苦手で、かつ、スポーツに参加する機会が得られてこなかった女子児童のためのスポーツをつくらうとした経緯があった。特に、ボールを両手でキャッチし、両手でアタックするというルールには、少女たちみんなが楽しめるスポーツを創造しようとする願いがこめられていた。また、練馬区を中心とする学校教員や地域の人々によって精力的に普及活動がなされるとともに、練馬区体育協会加盟を契機として生涯スポーツ化がめざされ、少年スポーツから青年・成人スポーツへと発展していく。それにともない、ルールにこめられた願いが、少女たちから老若男女みんなが楽しめるスポーツへと変化していったことが把握できる。現在もその経緯が大事にされ、自然な動きをなるべく許容しながら、みんなが楽しめるルールづくりを選手と運営者が協力しながらおこなっている。

当時、東京オリンピックを契機としたバレーボールの普及が進展している最中であり、6人制の女子バレーボールを普及することも可能であっただろう。しかし、当時の練馬区の青少年育成南町地区委員会は、スポーツへの参加機会が保障されていなかった女子児童を対象にして、スポーツに人を合わせるのではなく、人にスポーツを合わせながら、新たなスポーツを創造しようとした。メジャースポーツが目される社会的な背景の中で、ヒューマニズムに根ざした市民スポーツが創造されてきたことは注目できる。

また、現在、練馬区キャッチバレーボール協会は、

競技の普及をめざし、小学校への出前授業を積極的に実施している。他にも、体育科の時間だけではなく、道徳や総合的な学習の時間を活用し、地域教材として学校教育へ導入することで、小学生への認知度を高めている<sup>8)</sup>。学校教育との連携以外にも、普及を目的とした様々な活動が組織されており、こうした活動からも練馬区キャッチバレーボールには、地域スポーツにおける継承・発展の現状と課題を考える内容が豊富にあると考えられる<sup>9)</sup>。

#### IV. 練馬区キャッチバレーボールの調査結果

##### 1. 生涯スポーツとしての特徴についてのアンケート結果

生涯スポーツとしての特徴を把握するため、女子ヤング・一般選手へアンケートを実施した結果は、表1・2のようになった。

「生きがいにつながっているか」という質問について、無記入(n=1)を除き、全員(n=32)が生きがいに「なっている」と回答した。また、「生涯スポーツとして適切か」という質問について、「適切ではない」と回答したのは1名であり、多くの回答者(n=32)が生涯スポーツとして「適切である」と回答している。

「生涯スポーツとして適切な理由は何か」という質問について、無記入(n=6)を除き、「体力・能力・年齢に応じて老若男女がプレーできる」(n=22)、「コミュニケーションが取りやすい」(n=2)、「健康の保持増進」(n=1)、「余暇の中心になっている」(n=1)といった回答があげられた。「体力・能力・年齢に応じて老若男女がプレーできる」の具体的な回答として、「小学生から中高年まで老若男女関係なく楽しめる」(n=20)が最も多くあげられた。次に、ボールをキャッチできるために必要以上に跳ぶ必要がないことや、9人制は責任範囲が狭く、ローテーションがないため専門的にプレーできることから、「体力、能力に合わせてプレーできる」(n=2)ことがあげられた。また、比較的ネットが低く、かつ、ボールキャッチできる3秒間を有効に利用して攻撃できるために、「身長の高さ関係なく楽しめる」(n=1)こと、「激しくない」(n=1)ことがあげられた。「コミュニケーションが取りやすい」の具体的な回答として、「地域スポーツのため知人が多いため」(n=1)、「みんなで楽しくプレーするため」(n=1)があげら

れた。なお、「適切でない」(n=1)と回答した理由については記入がなかった。

表1. 生涯スポーツとしての特徴についてのアンケート結果

設問	カテゴリー	記述数
生きがいにつながっているか (複数回答)	なっている	32
	なっていない	0
生涯スポーツとして適切か (複数回答)	適切である	32
	適切ではない	1

表2. 生涯スポーツとしての特徴についてのアンケート結果

設問	カテゴリー	サブカテゴリー	記述数	
生涯スポーツとして適切な理由は何か (自由記述)	体力・能力・年齢に応じて老若男女がプレーできる	小学生から中高年まで老若男女関係なく楽しめる	20	24
		体力、能力に合わせてプレーできる	2	
		身長の高さ関係なく楽しめる	1	
		激しくない	1	
コミュニケーションが取りやすい	地域スポーツのため知人が多いため みんなで楽しくプレーするため	1	2	
		1		
健康の保持増進	体力・筋力の保持や増進		1	
余暇の中心になっている	現在、休日生活の中心になっている		1	

##### 2. 練馬区キャッチバレーボール独自の魅力についてのアンケート結果

練馬区キャッチバレーボールの魅力について、女子ヤング・一般選手へのアンケートをとった結果は、表3・4のようになった<sup>10)</sup>。

「プレー上のおもしろさは何か」という質問について、「みんながプレーできる」(n=17)、「予測不能なプレーがある」(n=12)、「連携プレーが多い」(n=9)、「ねらったサーブが打てる」(n=9)、「強いアタックが打てる」(n=8)、「アタックがたくさん打てる」(n=6)、「ねらったアタックが打てる」(n=4)、「ねらったところにトスがあげやすい」(n=3)といった回答があげられた。

「独自の魅力は何か」という質問については、「ボー

ルをキャッチすることではじくバレーボールとは異なるおもしろさが得られる」(n=10) や、「ボールをキャッチすることで参加しやすくなる」(n=9) といった回答が多くあげられた。前者における具体的な回答としては、ボールをキャッチすることで、早いパス回しが可能となり、ブロッカーとのかけひきが多くなることや、はじくバレーボールにはないフェイント等ができること、また、3秒間ボールを保持できるために「考える時間がある」(n=3) ことで、「はじくバレーボールにはない戦術的な攻防ができる」(n=7) ことがあげられている。後者については、ボールをキャッチすることで「動作が簡単」(n=1) となり、「時間がゆっくり」(n=1) で、「誰でもできる」(n=3)、「上達がはやい」(n=1)、「気軽にできる」(n=1) といったことがあげられている。

表3. 魅力についてのアンケート結果

設問	カテゴリー	記述数
プレー上のおもしろさ は何か (3つまで 複数回答)	みんながプレーできる	17
	予測不能なプレーがある	12
	連携プレーが多い	9
	ねらったサーブが打てる	9
	強いアタックが打てる	8
	アタックがたくさん打てる	6
	ねらったアタックが打てる	4
ねらったところにトスがあげやすい	3	

表4. 独自の魅力についてのアンケート結果

設問	カテゴリー	サブカテゴリー	記述数
独自の魅力は何か (自由記述)	ボールをキャッチすることではじくバレーボールとは異なるおもしろさが得られる	はじくバレーボールにはない戦術的な攻防ができる	7
		考える時間がある	3
	ボールをキャッチすることで参加しやすくなる	誰でもできる	3
		基本動作が簡単	1
		時間がゆっくり	1
		はじめやすい	1
		気軽にできる	1
上達がはやい	1		

3. 練馬区キャッチバレーボールの児童期における適性についてのアンケートおよびインタビュー結果

児童期における練馬区キャッチバレーボールの適性について、女子ヤング・一般選手へのアンケート結果は、表5・6のようになった。

「児童期に導入する上で適切と考えるか」という質問について、無記入(n=1)を除き、多くの人が「適切である」(n=31)と回答した。なお、「適切ではない」(n=1)と回答した理由としては、「膝に負担がかかる」ことがあげられていた。

「児童期に導入する上で適切と考える理由は何か」という質問について、無記入(n=5)を除き、「バランスよく運動能力を向上できる」(n=14)、「簡単な動作で激しすぎず、苦手な子どもでも参加しやすい」(n=13)、「団体行動やチームワークが学べる、友達との交流ができる」(n=9)、「発達によい影響がある」(n=1)という回答となった。「バランスよく運動能力を向上できる」の具体的な内容は、「『補球』『投球』『跳躍』などの全身運動を必要とし、バランスよく運動能力を向上できる」(n=5)、「体力の向上」(n=3)、「ボール操作能力の向上」(n=1)、「運動神経の向上」(n=1)、「瞬発力の向上」(n=1)、「下半身の強化」(n=1)、「身体機能の向上」(n=1)があげられた。「簡単な動作で激しすぎず、苦手な子どもでも参加しやすい」の具体的な内容は、「簡単な動作」(n=6)、「苦手な子どもでも参加可能」(n=4)、「激しすぎない」(n=2)、「ボールへの恐怖心の減少」(n=1)があげられた。「団体行動やチームワークが学べる、友達との交流ができる」(n=9)の具体的な内容は、「団体行動・チームワーク」(n=5)、「友達との交流」(n=3)、「チームプレーの楽しさ」(n=1)があげられた。

児童期における練馬区キャッチバレーボールの適性について、小学生チームの監督3名にインタビューをした結果、表7のようになった。結果、「『できる』経験が得られやすい」、「苦手な子どもでも活躍できる可能性がある」、「状況判断する時間があり意図的なプレーがしやすい」、「能力差が顕著にならず、みんなでプレーする喜びが得られる」、「集団スポーツのため集団行動を学べる」、「バランスよく運動能力を高められる」、「怪我が少ない」ことがあげられた。

表5. 児童期における適性についてのアンケート結果

設問	カテゴリー	記述数
児童期に導入する上で適切と考えるか (単一回答)	適切である	31
	適切ではない	1

表6. 児童期における適性についてのアンケート結果

設問	カテゴリー	サブカテゴリー	記述数
児童期に導入する上で適切と考える理由は何か(自由記述)	バランスよく運動能力を向上できる	「補球」「投球」「跳躍」など全身運動を必要としバランスよく運動能力を獲得できる	6
		体力の向上	3
		ボール操作能力の向上	1
		運動神経の向上	1
		瞬発力の向上	1
		下半身の強化	1
		身体機能の向上	1
	簡単な動作で激しすぎず、苦手な子どもでも参加しやすい	簡単な動作	6
		苦手な子どもでも参加可能	4
		激しすぎない	2
		ボールへの恐怖心の減少	1
	団体行動やチームワークが学べる、友達との交流ができる	団体行動・チームワーク	5
		友達との交流	3
		チームプレーの楽しさ	1
発達により影響がある		身長が伸びる	2

#### 4. はじくバレーボールへの発展性についてのアンケート結果

練馬区キャッチバレーボールのはじくバレーボールへの発展性について、女子ヤング・一般選手へのアンケートの結果は表8のようになった。

「(はじく)バレーボールへの発展性はあるか」という質問について、無記入(n=8)を除き、「とても活きる」(n=2)、「活きる」(n=8)、「少し活きる」(n=8)といった肯定的な回答(n=18)が、「あまり活かない」(n=5)、「活かない」(n=1)、「全く活かない」(n=1)といった否定的な回答(n=7)を上回った。ただし、「とても活きる」(n=2)よりも、「活きる」(n=8)や「少し活きる」(n=8)が多く、「活かない」(n=1)や「全く活かない」(n=1)よりも、「あまり活かない」(n=5)が多かった。

「どういったことが(はじく)バレーボールに活きるか」という質問について、無記入(n=15)を除き、「基本的なボール操作」(n=4)、「攻めや守りの連携プレー」(n=4)、「バレーボールの基本の

ルール」(n=3)、「フォーメーションやポジショニング」(n=3)、「ボールの落下地点に入っのレシーブ」(n=2)、「考え方」(n=1)、「ブロック」(n=1)が回答された。「どういったことが(はじく)バレーボールに活かないか」という質問について、無記入(n=17)を除き、「キャッチをするため、基本の動作が違う」(n=7)、「アタック時の足の動き」(n=3)、「フォーメーションやポジショニングが違う」(n=2)、「ブロックの仕方が違う」(n=2)、「連携の仕方が違う」(n=1)、「ゲームの展開が違う」(n=1)が回答された。

表7. 児童期における適性についてのインタビュー結果

質問	カテゴリー	回答内容
児童期における練馬区キャッチバレーボールの適性は何か	「できる」経験が得られやすい	「できる」という経験がより身近にある。「捕る」「投げる」といった基本的な運動なので、上達がはやく、できない子どもでも成長を感じられる機会が多い(D氏)
	苦手な子どもでも活躍できる可能性がある	消極的な子、苦手な子、へたな子も活躍できる場所に魅力がある(F氏) メジャースポーツであれば、体力、身長などではやくにあきらめざるをえないが、キャッチバレーボールはへたな子どもでもレギュラーになれる可能性がある(F氏)
	状況判断する時間があり意図的なプレーがしやすい	キャッチバレーボールの魅力は、「点ではなく、線になること」。バレーボールは反射的な運動で1プレーが点のようになる。それが、練馬区キャッチバレーボールだとボールを保持して考えることができ、1プレー1プレーが積み重なって線となる。プレーの意図がつながっていくところにおもしろさがある(D氏,E氏)
	能力差が顕著にならず、みんなでプレーする喜びが得られる	練馬区キャッチバレーボールは背が高くても勝てないため、みんなで一球をとる必要があり、集団スポーツの魅力を味わえる(E氏) 連携プレーを大事にすることで、誰かが1人にならないスポーツになる。プレーの間で、周りの子とどう連携して攻撃をするかを考えることで、みんなでいろんなプレーができることやその喜びを感じられる(D氏)
	集団スポーツのため集団行動を学べる	集団スポーツを通して、みんなで活動する仕方を学ぶことで、人間的に成長することができる(E氏)
	バランスよく運動能力を高められる	跳ぶ、投げる、動く、捕る、といった全身運動をおこなうことができることは、運動能力を高めることになる(D氏)
怪我が少ない	バレーボールと比較すると、怪我が少ない(D氏,E氏)	



表8. はじくバレーボールへの発展性についてのアンケート結果

設定	カテゴリー	記述数
(はじく)バレーボールへの発展性はあるか (単一回答)	とても活きる	2
	活きる	8
	少し活きる	8
	あまり活きない	5
	活きない	1
	全く活きない	1
どういったことが(はじく)バレーボールに活きるか (自由記述)	基本的なボール操作	4
	攻めや守りの連携プレー	4
	バレーボールの基本のルール	3
	フォーメーションやポジショニング	3
	ボールの落下地点に入っているレシーブ	2
	考え方	1
どういったことが(はじく)バレーボールに活きないか (自由記述)	ブロック	1
	キャッチをするため、基本の動作が違う	7
	アタック時の足の動き	3
	フォーメーションやポジショニングが違う	2
	ブロックの仕方が違う	2
	連携の仕方が違う	1
	ゲームの展開が違う	1

## V. 考察

### 1. 練馬区キャッチバレーボールの歴史的特徴

練馬区キャッチバレーボールが大衆スポーツとして創造される背景には、運動が苦手な、かつ、スポーツへの参加機会が得られてこなかった女子児童のためのスポーツをつくらうとした経緯があった。その後、練馬区体育協会加盟を契機として生涯スポーツ化がめざされ、ルールにこめられた願いが、少女たちから老若男女みんなが楽しめるスポーツへと変化していったことが把握できる。現在もその経緯が大事にされ、自然な動きをなるべく許容しながら、みんなが楽しめるルールづくりを選手と運営者が協力しながらおこなっている。

こうした練馬区キャッチバレーボールの歴史からは、スポーツの特性を理解することを目標にした教材化が期待できる。

中村(2009)は、フットボールが変革・創造されていく歴史的経緯を検討する中で、新しいスポーツは、過去と現在のせめぎ合いの中で創造されていくこと、またその際は、特定のプレー上の制限があり、

その制限の中で新たな戦術や技術が発展し、独自のおもしろさが構築されていくことを述べている。

まさに練馬区キャッチバレーボールが変革・創造されてきた歴史は、大衆化をめざす人々の手によって、運動が苦手な子でもプレーできるよう両手キャッチの制限がなされ、そこから新しい戦術や技術が開発されていった。そして、それらは、成人選手もプレーされるようになる中で、ルールが調整されていきながら、老若男女誰もが楽しめる生涯スポーツとして発展してきた経緯がみられる。さらに、現在も大会における選手からの要求を契機にして、ルールについての議論がなされており、選手と運営側が協力してルールをつくりかえている実態がある。また、競技引退後も強い思いをもって競技の発展・普及や大会等の運営に自ら参加しようとする人も多くいる。こうして、地域スポーツがつけられる歴史的経緯や現在の姿から、スポーツはつくりかえることができることやつくりかえる方法について学習することが可能となる。また、スポーツと人との多様なかわり方も学習することが可能となる。

現在、練馬区キャッチバレーボール協会は、競技の普及をめざし、小学校への出前授業を積極的に実施している。他にも、体育科の時間だけではなく、道徳や総合的な学習の時間を活用し、地域教材として学校教育へ導入することで、小学生への認知度を高めている。こうした機会を活用しながら、練馬区キャッチバレーボールの変革・創造に関わってきた人物や、現在も練馬区キャッチバレーボールをよりよいものへとつくりかえようとしている人物から直接的に話を聞くこともできよう。

このように、地域スポーツを教材とすることで、スポーツの社会的、文化的な認識を育成することが可能となる。また、体育科・保健体育科だけではなく、他教科や特別活動とも関連させられる。

### 2. 練馬区キャッチバレーボールにおける生涯スポーツとしての特徴

生涯スポーツとしての特徴についてのアンケート結果では、練馬区キャッチバレーボールが、「体力・能力・年齢に応じて老若男女がプレーできる」ことを最も多く回答しており、誰でも参加可能な生涯スポーツとして、人々に受容されていることが示唆されている。生涯スポーツにおいては、「いつでも、誰でも」楽しめることは重要な要素となっており、

練馬区キャッチバレーボールは、この点で高い評価が得られていると考えられる。特に、一般の部においては、青年から高齢者まで幅広い年齢層が同様のチームと一緒にプレーをしており、このことは、競技歴を長くし、柔軟にチーム編成できるため、地域スポーツとして魅力的なことであろう。

こうした特徴が導出される主要因には、練馬区キャッチバレーボールにおける、ボールをキャッチできるという独自ルールが存在が考えられる。

ボールをはじくのではなく、ボールをキャッチして投げることができれば、誰でもプレーに参加することが可能となる。はじくバレーボールのように、はじいてボールを操作したり、ねらった方向や位置にトスをだしたり、トスされたボールにタイミングをあわせて打ったりすることは、習熟が必要となる高度な技能である。また、空中で片手を振り切るため、スパイク動作はバランスを崩しやすく、着地の際に膝への身体的な負担も大きくなる。しかし、練馬区キャッチバレーボールでは、スパイクは両足同時にジャンプし、両手で投げられるよう制限されており、バランスを崩しにくく、膝への負担も軽減されている。片足でジャンプしたスパイクは反則となるため、無理な大勢でスパイクを打つことが減少するのである。さらに、スパイクは片手ではじくよりもスピードやボールの回転数も少なく、レシーブの恐怖感が軽減されている。ただし、アンケートで1名が児童期には「適切ではない」理由として膝への負担をあげていた。攻撃機会も多いため、怪我につながる可能性は回避できないが、上記の理由で、はじくバレーボールよりも負担が軽減されていると考えられる。このように、レシーブ・トス・スパイクのすべてのプレーにおいてボールをキャッチするため、初心者や子ども、高齢者でも参加しやすくなっている。

また、練馬区キャッチバレーボールでは、ボールをキャッチした際、3秒間以内はボール保持してよいことになっている。そのため、はじくバレーボールと異なり、わずかに考える時間がある。練馬区キャッチバレーボール協会理事の赤星は、この“3秒の間”があることでプレーを創意工夫できることが、練馬区キャッチバレーボールならではの魅力だと提起している（キャッチバレーボール FUN!, web）。キャッチすることでボールの動きを止めるため、時間がゆっくりになるとともに、相手コートスペース

を確認して攻撃したり、相手に何をするか考えさせるフェイントプレーをしたりと、状況判断にもとづく意図的なプレーが可能となる。瞬時のプレーではなく状況判断する時間があるため、簡単なミスも減少し、また、低身長の人でも攻撃参加しやすく、連携プレーも実現しやすくなると考えられる。

さらに、練馬区キャッチバレーボールは、小学生・女子ヤング（中学生以上の女性）・一般女子（25歳以上の女性）・一般男子（中学生以上の男性）の部が設定されており、多様な参加形態をもっている。そのうち、一般女子は、9人制を採用し、ローテーションが導入されていない。そのため、ポジションを固定することも可能となるため、それぞれの能力に応じて競技に参加することが可能となっている。

以上のように、練馬区キャッチバレーボールは、ボールを両手でキャッチし、また、3秒間以内ボール保持できることや、アタック動作を両足同時ジャンプに制限することによって、老若男女、誰もが参加しやすい競技となっている。また、多様な競技形態があり、体力・能力・年齢に応じて参加できることも、生涯スポーツにつながる特徴となっている。

### 3. 練馬区キャッチバレーボールにおける独自の魅力

#### 3-1. アンケート結果より

プレー上の魅力についてのアンケート結果より、練馬区キャッチバレーボールの魅力として、「みんながプレーできる」、「予測不能なプレーがある」、「連携プレーが多い」、「ねらったサーブが打てる」、「強いアタックが打てる」といった回答が多くあげられた。また、独自の魅力についてのアンケート結果より、「ボールをキャッチすることではじくバレーボールとは異なるおもしろさが得られる」、「ボールをキャッチすることで参加しやすくなる」といった回答が多くあげられた。これらの回答からは、練馬区キャッチバレーボール独自の魅力は、ボールをキャッチすることによる、「容易に参加でき、みんながプレーできること」、「意図的なプレーが可能となり、予測不能なプレーや連携プレーが多いこと」、「ラリーが続き、攻撃機会が多く得られること」として整理できよう。

#### 3-2. 攻防の緊張関係と連携プレーの多様性

練馬区キャッチバレーボールの魅力を解明する上で、「意図的なプレーが可能となり、予測不能なプ

レーや連携プレーが多いこと」について、より具体的に考察することは重要であろう。地域の生涯スポーツとして普及するためには、プレー上で独自のおもしろさが味わえることがもとめられる。そこで、以下では、プレー上で生起する独自の魅力について考察する。

まず、注目できるのは、アンケート結果で回答された、「予測不能なプレーや連携プレー」および「ブロッカーとのかけひき」に関連する具体的なプレーの様相である<sup>11)</sup>。

練馬区キャッチバレーボールにおいては、両手でアタックを打つことから、2番目に触球するプレイヤーが、キャッチ後もトスだけではなくアタックをすることが可能となる。つまり、2番目にボールをキャッチした人は、いつでもアタックを打つ可能性をもっており、ディフェンスは、そのブロックやレシーブ体勢をとらなければならない。はじくバレーボールでは、3段攻撃が基本となるため、トスされたボールを、3番目に触球するアタッカーが打つまで若干の時間がある。もちろん、はじくバレーボールにおいても、セッターが前衛プレイヤーである時、レシーバーが意図的にレシーブトスできれば、ツーアタックを警戒させる戦術をとることも可能である。しかし、後方からあげられたトスを打つことはとても高度な技能であり、ましてやスパイクレシーブで実現することはきわめて困難である。一方、練馬区キャッチバレーボールは、常に2番目のプレイヤーが、キャッチ後にすぐさまアタックを打てるため、攻防の緊張関係ははじくバレーボールよりも早期に出現するのである。

また、練馬区キャッチバレーボールでは、トスするプレイヤーが、必ずしもネット手前中央に位置するプレイヤーである必要はない。両手でボールをキャッチすることができるため、トスの専門家を設定する必要性が低いのである。さらに、上述したように、3秒間以内のボール保持時間があることで、アタックまたはトスのフェイントをかけられる。たとえば、前衛左のアタッカーが2番目のプレイヤーとなり、その後、アタックをするか、フェイントをかけて逆サイドまでパスをだし、連携プレーをつくりだせる。また、ボールが高ければ空中でボールをキャッチしてそのままアタックを打つか、着地してブロックをかわしてから再度アタックを打つ、またはトスをあげることもでき、はじくバレーボールで

はみられない攻撃の立て直しも可能である。

こうして、はじくバレーボールと異なり、常にボールが中央に集約されるわけではないため、アタック位置が分散する。そして、フェイントをかける時間が確保されていることやボールを両手で操作するため安定した位置にトスをあげられることから、連携プレーの多様性（＝予測不能なプレー）が増加しているのである。

さらに、誰もがセッターになりアタッカーになることから、1人ひとりの前衛選手のフェイントプレーが重要となる。いかに目の前のブロッカーを引きつけるのかが問われるため、連携プレーだけではなく個々のフェイントプレーにおいても選手のオリジナリティーを追求できる。

しかし、もしもアタックを片手で打つものとしてしまうと、上述したように、2番目にボールをキャッチしたプレイヤーは、アタックができず、必ずトスすることになるため、上述したようなブロッカーとの緊張関係は低下してしまう。そのため、両手でのボールキャッチと両手でのアタック、3秒間以内のボール保持についてのルールは、練馬区キャッチバレーボールにおいて独自のおもしろさを創出する重要なルールとなっていると考えられる。このルールがあることで、はじくバレーボールにはない、新たな攻防の緊張関係や戦術的なかけひき（予測不能なプレーや連携プレー）が可能となっているのである。

### 3-3. ボールをキャッチすることがゲームを簡単にも、複雑にもする

アンケート結果においては、3秒間ボールをキャッチすることで、基本動作が容易になることが魅力としてあげられていた。一方で、ボールをキャッチすることで、自チーム内のボール回しや攻防の展開がスピード化することも魅力としてあげられている。練馬区キャッチバレーボールでは、ボールをキャッチできるため、必ずしも山なりの軌道でパスする必要はない。そのため、3秒間キャッチせずに即座の判断でボールを回すことで、バレーボールよりもスピーディーなボール回しも可能になるのである。これは、上述してきた「連携プレー」を高度なものにし、「予測不能なプレー」につながる要因にもなっていると考えられる。

したがって、練馬区キャッチバレーボールにおいて、ボールをキャッチすることは、ゲームを簡単に

も、複雑にもする、という二重の意味をもっている。初心者にとっては「簡単」だが、熟練者にとっては「複雑」なプレーを創造していくことができ、ゲームの魅力を深めているのである。

以上のように、練馬区キャッチバレーボールは、両手でのボールキャッチおよびアタックと、3秒間以内のボール保持可能といった独自のルールにより、ネット際の攻防をめぐる独自のかけひきがうみだされていた。

#### 4. 6人制と9人制のおもしろさの差異

体力・能力・年齢に応じて老若男女がプレーできる理由として、練馬区キャッチバレーボールでは、様々な競技大会が開催されていることを上述した。この点についても、プレーの質との関係で考察しておきたい。練馬区キャッチバレーボールにおける多様な競技形態は、大きく6人制・ローテーションありと、9人制・ローテーションなしの2つの競技形態に区別できる。同様のスポーツであるが、ルールに差異があることは、老若男女が楽しめるようにする工夫であると考えられる。練馬区キャッチバレーボールにおける6人制と9人制では、上述した共通の魅力がある一方で、プレーの質にどのような差異があるのだろうか<sup>12)</sup>。

6人制は、コート空間が大きく、能力を活かしてダイナミックな攻撃を創造することができる。特に前衛が3人となるため、2番目のボール保持者が相手ブロッカーとかけひきをおこなうことの重要性が増大する。また、ローテーションがないことから総合的なプレーがもとめられる。一方、9人制は前衛・後衛の区別がないため、4人から5人の選手をネット際でプレーさせることが可能となる。ブロックの人数も増加するため必ずアタッカーに対して1人はブロッカーがついてくることになる。そのため、アタック専門やトス専門、レシーブ専門を設定するなど、それぞれの能力を活かしてチームで多彩な戦術を創造することがめざされる。

このように、6人制と9人制のそれぞれに独自性があり、バレーボールにおける多様なおもしろさが味わえるようになっているのである。競技形態によって、そのプレーの質も変化しており、それだけ練馬区キャッチバレーボールの楽しみ方も多様性をもつことを示唆している。

#### 5. 練馬区キャッチバレーボールにおける児童期の適性

児童期の適性についてのアンケート結果から、「バランスよく運動能力を向上できる」、「簡単な動作で激しすぎず、苦手な子でも参加しやすい」、「団体行動やチームワークが学べる、友達との交流ができる」、「ボール操作能力が向上する」といった回答が多くあげられた。児童期の適性についてのインタビュー結果からは、「『できる』経験が得られやすい」、「苦手な子でも活躍できる可能性がある」、「状況判断する時間があり意図的なプレーがしやすい」、「能力差が顕著にならず、みんなでプレーする喜びが得られる」、「バランスよく運動能力を高められる」、「怪我が少ない」ことがあげられた。

これらをふまえると、練馬区キャッチバレーボールが児童期に適性である理由として次の5点が考えられる。

①ボールをキャッチするため、運動が苦手な子でも恐怖心が少なく、ボール操作もしやすいため、「できる」経験が得られやすい。

②アタックは両足同時跳びかつ両手投げとなり打点も低くなるため、体格差の影響が少ない。そのため、運動が苦手な子や低身長の子でも戦術・技術的なポイントを理解すれば、十分に活躍できる可能性をもっている。

③ボールを保持する時間が確保されていることから、状況判断する時間があり、意図的なプレーがしやすい。運動が苦手な子にとっては、ボール運動における瞬時の状況判断は困難であるため、考える時間があることは学習したことを活かしたプレーにつながる可能性がある。

④両手でのボール操作が基本となるため、偏った動作が少なく、かつ「捕球」「投球」「跳躍」といった様々なボール操作や動作を経験することから、バランスよく運動能力を育むことができる。

⑤アタック動作が両足同時ジャンプとなるため、無理な大勢で攻撃することが制限され、足首や膝への身体的負担が軽減されており、怪我が少ない。

#### 6. 練馬区キャッチバレーボールにおけるはじくバレーボールへの発展性

はじくバレーボールへの発展性についてのアンケート結果から、練馬区キャッチバレーボールははじくバレーボールにも発展すると考えられているこ

とが示唆された。ただし、回答が多かったのは、「活きる」、「少し活きる」、「あまり活かない」となっており、直接的につながる面も多いが、つながらない面もあることが考えられる。

アンケート結果から、つながる面として、「基本的なボール操作」、「攻めや守りの連携プレー」、「バレーボールの基本のルール」、「フォーメーションやポジショニング」などがあげられた。一方、つながらない面として、「キャッチをするため、基本の動作が違う」、「アタック時の足の動き」、「フォーメーションやポジショニングが違う」、「ブロックの仕方が違う」などがあげられた。

回答内容をふまえると、はじくバレーボールと同様のレシーブ・トス・スパイクの形をとり、またブロックやフォーメーションの取り方などは類似している点が多いことから、基本的なゲームの展開やルール、プレー上の予測・判断などは発展性があると考えられる。一方で、両手キャッチ・両足ジャンプなどの練馬区キャッチバレーボール独自のルールによって、基本的な動作やプレーが厳密には異なる動きとなることが指摘されている。

したがって、基本的なボール操作や動き方については発展性をもつが、厳密にはすべての動作がそのままはじくバレーボールの動作に発展するわけではない、ということが示唆されている。それほど練馬区キャッチバレーボールが独自性を保持していることが強調される結果となった。

## 7. 練馬区キャッチバレーボールの教材的価値

これまで検討してきたことをふまえ、地域スポーツである練馬区キャッチバレーボールの教材的価値は、次の5点に整理することができる。

①〔簡単な基本動作で誰もが参加でき、安全に配慮されている〕

3秒間以内ボールをキャッチできるため、簡単でゆったりとした基本動作となり、誰もがプレーに参加できる。そのため、「できる」経験が得られやすい。プレーが一時的に止まるため、相互観察も容易となり、学び合う活動を組織しやすいと考えられる。また、スパイク動作は両足同時ジャンプに制限されているなど、児童期においても身体的な負担が少ない動作であり、安全面に配慮されている。

②〔バランスよく運動能力を育成でき、空中でボールをはじいてつなぎ合うバレーボールへも発展して

いく〕

「捕球」「投球」「跳躍」といった様々な動作を実施し、全身運動により運動能力をバランスよく育成できる。また、基本的なルールやプレーについては、はじくバレーボールとの類似点も多く、発展性をもつ。ただし、両手でのボールキャッチや両足同時ジャンプなどの独自のプレーが存在するため、すべてが発展性をもつわけではない。

③〔独自のおもしろさをめぐる戦術・技術的な探求ができる〕

キャッチ後に3秒間以内のボール保持時間があることで、状況判断をとまなう連携プレーが課題となり、ネット際の攻防をめぐる素材独自の戦術的なおもしろさが保障されている。基本動作も簡単なため、系統的に戦術・技術の探求的な学習を組織することができる。また、そのことを通して、バレーボールの特質である「アタックを含むラリー」のおもしろさを味わうことができる。

④〔スポーツの社会的、文化的な認識を育成できる〕

大衆スポーツとして創造されてきた歴史的経緯が明確であり、人にスポーツを合わせて、みんなが楽しめるスポーツへとつくりかえてきた、さらには、現在つくりかえている過程を学習できる。そこから、スポーツの社会的、文化的な認識を育成することができる。

⑤〔体育科・保健体育科だけではなく、他教科や特別活動とも関連させられる〕

地域教材としての可能性をもっており、体育科・保健体育科だけではなく、他教科や総合的な学習の時間、特別活動と関連させたカリキュラムを構想することができる。

## VI. 地域スポーツの教材化に向けて

### 1. 独自のおもしろさを味わうことを保障する

草馬・梅垣(2009)、梅垣ら(2009)は、練馬区キャッチバレーボールを修正した教材で、戦術学習の効果を検証している。しかし、梅垣ら(2009)の修正は、はじくバレーボールへの発展を重視してアタックを両手ではなく片手で打つように修正している。確かに、他の先行研究にもみられるように(埜, 2013)、バレーボールの戦術学習においては有効な改変となるだろう。

しかしそれでは、練馬区キャッチバレーボールがもつ独自のおもしろさを放棄することになる。上述したように、練馬区キャッチバレーボールにおいては、両手でアタックを打ち、かつ3秒間以内のボール保持時間があることから、2番目に触球するプレイヤーが、ボールキャッチ後に、トスだけではなくアタックすることが可能となる。もしもアタックを片手で打つとしたら、2番目のプレイヤーがキャッチした後は、アタックできなくなってしまう。練馬区キャッチバレーボールの場合、キャッチ後のアタックも可能となるため、攻防の緊張関係が、はじくバレーボールよりも早い段階で生起すると同時に、ブロックをはずすための独自のボール回しによるコンビネーションプレーが創造されることになる。

この点をふまえれば、練馬区キャッチバレーボールを教材化する際、両手アタックを片手アタックにしてしまうことは、素材独自のおもしろさを喪失させてしまうことになるのである。

そのため、地域スポーツを教材化する際は、その独自のおもしろさ（特質）を保障するルールを大事にした上で、コートや道具、その他のルール等を工夫し、戦術・技術学習を通して独自のおもしろさをみんなが味わえるよう教授学的改変をしていく必要がある。系統的指導と学習集団形成も独自のおもしろさを味わう観点から構想することがもとめられる。

## 2. 地域スポーツの特性を理解する観点から、実技学習と理論学習を関連づける

出原（2004）が提起する、運動文化の主体者形成という観点から、地域スポーツを教材化する際、子どもたちのスポーツの見方・考え方を豊かにするとともに、スポーツをつくりかえていくことの重要性を理解させることが期待される。そのためにも、地域スポーツの特性を理解する観点から、上述してきたような、歴史的特徴、独自のおもしろさ、組織・運営についての現状や課題などを学習内容として構想することがもとめられる。歴史的特徴であれば、メジャースポーツの高度化に対して、地域の人たちみんなが楽しめる大衆スポーツが開発されてきた経緯や、開発当時の願いや想いをふまえ、現在まで変革・創造されてきた歴史的経緯が学習内容となる。独自のおもしろさでは、メジャースポーツと類似するプレーやルールで共通するおもしろさを味わえるとともに、地域で継承・発展させられてきた背景に

は、独自のおもしろさが内在化していることが学習内容となる。特に、その独自性が、戦術・技術的なプレーとしてあらわれていることや、それらはプレイヤーたちによって変革・創造される過程で徐々に確立されてきたことが学習内容となる。組織・運営の現状と課題では、地域スポーツだからこそ、どのように地域の人が運営に関与し、より豊かなものに変革しようとしているか、また現在、地域スポーツゆえにどのような組織的活動をし、どのような課題をもつかが学習内容となる。

こうした学習内容は、実技学習と理論学習のどちらかを実施するだけでは、十分に理解することができないだろう。理論学習で歴史的特徴を把握することは、実技学習の際に、ルールの意図や開発者の願いや想いの体験的な理解を促進することが期待できる。独自のおもしろさについても、実技学習における系統的な学習や探究的な学習と関連させることで、メジャースポーツにはない独自の特徴についての理解がより深まることが期待できる。組織・運営の現状と課題では、教材とする地域スポーツのよさについて実技学習を通して理解することで、地域スポーツがかかえる課題の共感的な理解を促進することが期待できる。

以上のように、運動文化の主体者形成を目標として地域スポーツを教材化する際は、地域スポーツの特性を理解する観点から、実技学習と理論学習を関連づけて、授業を構想していく必要がある。

## Ⅶ. 研究の限界と今後の課題

本研究では、生涯スポーツの実現に向けて、地域スポーツを学校体育へ導入していくために、練馬区キャッチバレーボールにはどのような教材的価値があるのかを検討してきた。その結果、練馬区キャッチバレーボールの教材的価値として、5点を解明することができた。また、地域スポーツを教材化する際の視点を提起することができた。

しかし、本研究においては、限られた対象者へのインタビュー調査およびアンケート調査しか実施できていない。練馬区キャッチバレーボールの競技人口を想定すると、わずかな対象者数である。また、本研究では、地域スポーツとしての現在の特徴を解明するために、中学生以上の選手を対象としたため、小学生がどのような評価をしているのか、どのよう

なゲームを展開しているのかは解明していない。そのため、練馬区キャッチバレーボールにおける教材的価値を包括的に解明できとは言えない。今後は、回答者数を増やした発展的な調査が課題となる。

また、生涯スポーツの実現をめざす上で、地域スポーツとしての教材的価値は、戦術・技術学習の視点だけではなく、スポーツの社会科学的内容や他教科・領域と関連させる観点からより一層充実させていくことがもとめられている。今後は、他の地域スポーツも検討しながら、地域スポーツを教材化することで、スポーツの見方・考え方を深めていく学習や、教科横断的な学習のあり方を解明していくことも課題となる。

## 謝辞

本研究の情報収集、アンケート・インタビュー調査については、練馬区キャッチバレーボール協会の片山雄敬氏、赤星玄氏をはじめ、協会関係者の皆様および選手の皆様に多大なるご協力をいただきました。練習や大会に参加させていただく機会は、本研究を遂行する上で貴重な経験となりました。ご協力いただいた皆様には、心より感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

出原泰明 (2004) 異質協同の学び. 創文企画.  
井上勲 (1999) ネットボールが出来るまで. 練馬区キャッチバレーボール協会編, 練馬区キャッチバレーボール協会 30 周年記念誌, p.6.  
梅垣明美・草島進之介・上谷浩一 (2009) キャッチバレーボールの教材化に関する研究. 大阪体育大学紀要, 40 : 131-142.  
内海和雄 (2001) 「ママさんバレー」の実態と意義. 一橋論叢, 125 (2) : 115-131.  
梶和美 (2009) 30 周年を迎えて・・・今後の目標. 練馬区キャッチバレーボール協会編, 練馬区キャッチバレーボール協会 30 周年記念誌「扉 (TOBIRA)」. 文栄社, p.1.  
梶和美・宮本知子・片山雄敬 (2009) 座談会 キャッチバレーボールの誕生と成長 協会成立までの 10 年間の歩み. 練馬区キャッチバレーボール協会編, 練馬区キャッチバレーボール協会 30 周年記念誌「扉 (TOBIRA)」. 文栄社, pp.21-25.  
キャッチバレーボール FUN! (web) 向山ナインスターズ 赤星監督インタビュー 後編 (記事掲載日,

2018 年 8 月 2 日). (<https://www.catch-fun.net/interview01-kouyama2/1484/>, 最終アクセス: 2021 年 5 月 10 日)

草島進之介・梅垣明美 (2009) キャッチバレーボールの教材としての有用性に関する研究. 日本体育学会第 60 回記念大会抄録, p.269.  
桜井敬 (2009) (社) 練馬区体育協会加盟と区民大会. 練馬区キャッチバレーボール協会編, 練馬区キャッチバレーボール協会 30 周年記念誌「扉 (TOBIRA)」. 文栄社, p.10.  
玉腰和典 (2018) 教科内容研究をベースにした「体育科の見方・考え方」. 学校教育, No.1215, 2018, pp.14-21.  
張坤・長見真 (2012) 体育学習における「ニュースポーツ」の取り扱いに関する研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 13 : 53-60.  
中村敏雄 (2009) フットボール. 吉田文久編, 中村敏雄著作集, 創文企画.  
練馬区キャッチバレーボール協会 (2013) 練馬区キャッチバレーボール競技規則 [9 人制]. 練馬区キャッチバレーボール協会.  
練馬区キャッチバレーボール協会 (web) ホームページ. (<http://www.catchvolleyball.org/>, 最終アクセス: 2021 年 5 月 10 日)  
練馬区ネットボール協会 (1994) ネットボール競技規則. 練馬区ネットボール協会.  
野口嘉郎 (2009) 創立 30 周年をお祝いして. 練馬区キャッチバレーボール協会編, 練馬区キャッチバレーボール協会 30 周年記念誌「扉 (TOBIRA)」. 文栄社, p.5.  
埜左敏 (2013) ネット型ゲーム導入としてのキャッチバレーボールの有効性. 日本教科教育学会誌, 36 (3) : 1-12.  
村井俊介 (2019) オールタナティブなバレーボールの普及の考え方にはどのような視点があるのか: 組織代表者へのインタビュー調査の結果から. 体育学研究, 64 (1) : 401-418.  
文部省 (1949) 学習指導要領小学校体育編 (試案).  
文部省 (1953) 小学校学習指導要領体育編 (試案).  
文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領. 東洋館出版.  
柳沢恰子 (2009) ネットボールからキャッチバレーボールへの名称変更. 練馬区キャッチバレーボール協会編, 練馬区キャッチバレーボール協会 30 周年記念誌「扉 (TOBIRA)」. 文栄社, p.12.

## 注

- 1) こうした実態について、玉腰（2018）は、ローカルルールを1つのルールへ一元化してきた近代スポーツが、それをもとにしながら再びローカルルールをつくりだしていく現象として把握し、「近代スポーツの再ローカル化」が生起していると述べている。
- 2) なお、⑤については、あくまでも共通点や相違点を検討して、教材化に向けた可能性を解明することが目的であり、練馬区キャッチバレーボールを学習した後で、必ずはじくバレーボールに発展させなければならないと考えているわけではない。
- 3) 以下では、当時開発・普及に関わった人物の名前をあげるが、苗字のみしか把握できなかった人物には名前を記入しない。苗字・名前ともに判明した場合は、両方を明記する。また、地名や小学校はすべて練馬区のため、練馬区の区名は省略する。
- 4) A氏へのインタビューより。
- 5) A氏へのインタビューより。
- 6) A氏へのインタビューより。
- 7) A氏・B氏へのインタビューより。
- 8) 以下、A氏へのインタビューをふまえ、考察した。
- 9) 現状と課題という観点は、普及の方法を考えるという視点だけではなく、現実的に直面している課題を考えるという視点ももつ。たとえば、インタビューをする中で、「少女のためのスポーツ」として開発されてきた経緯から、男子の参加をどのように考えるとよいのかについては異なる意見がみられた。また、普及をめざすと同時に「練馬区」という名称をどのようにあつかうのかも課題として意識されていた。このように、地域スポーツは地域性をもって開発されたゆえに、起源的な想いや普及の仕方については内在的な課題をかかえることになる。本研究では、練馬区キャッチバレーボール協会が現状と課題をどう把握しているのかを解明するものではないが、そのことは、地域スポーツを教材化する上で重要な学習対象になると考えられる。
- 10) 表4の結果においては、「キャッチすること」（n=1）や「ローテーションにより専門的にプレーできる」（n=2）ことが回答されていたが、具体的な理由が明記されていないことや、練馬区キャッチバレーボールにはローテーションがある部門があり、また9人制バレーボールにも共通す

るルールのため、「独自の魅力」という点で根拠があまりないと考え、回答から除外した。

11) 以下、C氏へのインタビュー結果をふまえ、考察した。

12) 以下、C氏へのインタビュー結果をふまえ、考察した。

## 付記

本研究は、2018年度白金心理学会活動奨励費（代表：田中紗良）の補助をうけて実施したものである。

（2021年5月18日受付）